

太一は生まれつき心臓の畸形だった。

生後九ヶ月の時余命はもって十歳までと診断され、父さんと母さんは悔いしないよう残り七十年分愛することにした。

「兄貴んちって品揃え悪いよな、ゲームの」

「ゲームなら家でやれよ、俺んとこに寄らず。勉強の邪魔」

「いいじゃん別に、電車で三駅なんだから遊びにきたつてつか大学とそんな距離愛わんねーしうちから通えばいいじゃん。わざわざ一人暮らしとかわけわかんね、金もつたいねー。やつぱさ、あれ？ 親元を離れ自由を満喫したいとか支配からの逃走気取っちゃつてんの？」

「尾崎か。古い」

「家でゲームやつてつとババアがうるさいんだよ、心臓に悪いからつてシューティングやホラーやらしてくんねえしさ。俺ができるのぶよぶよとかテトリスとか落ちゲーだけ。あと太鼓の達人？」

「音ゲーも十分体に悪い。めちやくちやスタミナ使うぞあれ」

そんな太一は十六歳になった。

高校一年生だ。

どうやら反抗期とやらに突入した模様で、俺のレポートにたびたび入り浸つてる。

両親の過保護ぶりにうんざりして逃げてきた先では放任される。

かえつてこつちのが居心地いいみたいで、へたくそな鼻歌まじりにゲームソフトをあさつてはとっ散らかす姿は実に伸び伸びしてる。

テレビの前に胡坐をかいてゲームソフトを漁っていたが結局お気に召すのがなかったらしく、テーブルでレポート執筆中の俺んところに這いよつてくる。

「せっかく弟が遊びにきたんだから、むずかしー本読んでねえで対戦しようぜ」

「レポートの締め切りが近いんだよ」

太一はわがままで気分屋だ。

過保護に育てられたせいで堪え性がない。

ごねる太一を無視し、フローリングにじかに置いたテーブルに向かい、分厚い専門書をばらばらめくつてノートパソコンを叩く。

太一とは四歳離れてる。

俺は今大学生で、心理学部に籍を置いている。

大学生は暇じゃない。少なくとも用もないのにだらだらする一人暮らしの兄のレポートに入り浸つて、ゲームや漫画に現を抜かす暇人の弟をかまうほどには。

参考書から顔も上げずレポートの下書きを続行すれば、こ

不満そうに鼻を鳴らし、サバンナのライオンの如く悠然と寝転がる。顔の周りにたてがみのように茶髪が広がる。

同じ親から生まれたのに俺たちはあんまり似てない。

俺はごくごく平凡な顔をしている。

外見的特徴といえばセルフレームの眼鏡と芯の固い黒髪、神経質そうな目つき。服のセンスもださい。もさつとしてる。

太一は俺と正反対、明るい茶色の髪は中途半端な長さで、だけどそれがさりげなくお洒落に見える。非の打ち所ない美形というよりも造作が崩れているのが魅力になる快活な顔立ちで、女の子にモテるのがよくわかる。

……実の兄から見ると下がり気味の口角や笑ってるように笑ってない目元にそこはかとなく一癖ありそうなルックスだ。

太一がテーブルに乗った分厚い本の一冊を手取る。

「なに読んでんの」

「ジグムント」

「だれ？ 外人？」

「フロイトって言えばわかるか」

「医者だっけ」

「精神医学の始祖。ユングと二大名人。学校でやらないか」

「聞いたような覚えはあるけど……で、その人の本楽しいの」

「面白い」

ぐうたら寝転がった姿勢のまま片手でテーブル上をさぐり、取り上げた本をばらばらめくる。

「兄貴さーうち帰ってこねえの」

「うん」

「なんで」

「帰りたいくないから」

「俺のせい？」

本のページを惰性で羽ばたかせつつ言う。キーを叩く手にとまる。

「俺がいるから、帰ってこないのになって」

「……もう大学生だぜ。とつくに親離れしてるよ、どっかのすねかじりと違って」

今さら寂しさを覚えはしない。

そんな時期、とつくに過ぎ去ってしまった。

コイツは悪くないと理屈ではわかってる。

「兄貴さあ、かまってよ」

「うるさいよ。帰れよ。忙しいんだ、今手放せないの。見

てわかんないか」

分厚い本をほうりだし寝転がる太一。

半袖シャツから突き出た二の腕、なめしたような肌に淡く光る産毛が綺麗だ。

「焼けたな」

「走ってっから」

太一は陸上部だ。無謀にも。はにかむ顔に白い歯が映える。中学では帰宅部だったが、高校にあがると同時に念願の陸上部に入った。親は心臓に万一の事があつたらと反対しただけど、どうせ長く生きられないんだから好きなことをおもしろいことやりたいと無理矢理入部したのだ。

「ずるいな」

太一はずるい。

余命をたてにしたら親は逆らえないと知ってて、その手を使ったのだ。

「知能犯つしよ」

「確信犯だな」

「今、どうせ余生みたいなもんだし。好きな事したいんだ」
太一は常に死を意識しないではいられない環境で育ってきた。

年に数回、軽い発作が起こる。

重篤な発作は三年に一度の頻度で起こる。

死は常に太一に寄り添ってる。

明るいとこほほど深くて濃い影ができるように。

ジェンガを1つ1つ積み上げ高くしても、崩れるときは一瞬。

「学校どうだ」

話題が尽きた居心地悪さをごまかすように聞く。

「普通」

「普通って、答えになつてねえよ」

「普通に楽しい」

「部活はどうだ」

「ばしばし走りこんでる。先週タイム更新したんだ、200メートルぶつちぎり。顧問に今度の大会代表で出ないかって言われた」

「すごいじゃん、一年で」

「断った。ババア説得すんのめんどいし、先輩に目えつけられるのもうざいし」

「勉強は……心配ないか」

入院が多いくせに、太一はふしぎと勉強もよくできる。

寿命は先負、されど万能。

「兄貴、教えてよ」

「なにがわからないんだ」

「保健体育」

「童貞のくせに」

「童貞じゃねえよ」

「え」

まじまじと太一の顔を見る。

「いつ」

「中2」

「……はやっ」

「そう？ 普通だろ、割と」

「お前の普通の定義おかしいよ。で、だれと。当時付き合ってたミカちゃんか」

「想像におまかせ」

「……モテるからなー、お前」

「兄貴だつて悪くねえよ」

「慰めどうも。でも良くもないつて続くんだろ」